

## 16世紀のヨーロッパにおける絵画形態の多様化現象をめぐって

京都大学が東京・品川の「京都大学東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ14「美術研究最前線」。3月6日の第3回講演では、文学研究科の平川佳世准教授が「16世紀のヨーロッパにおける絵画形態の多様化現象をめぐって」と題して、16世紀ヨーロッパに現れた多様な絵画作品について、その経緯や鑑賞方法などさまざまな観点から考察した。

### ●ルネサンスに続くマニエリスムの時代



講演する平川准教授。「マニエリスム時代に登場する、変わった素材に描かれた絵画に対する“なぜ?”という疑問が、研究のきっかけでした」

「すでに論文等で発表したものではなく、現在進行中の研究についてご紹介したいと思います」

主にルネサンス美術を専門にする文学研究科の平川佳世准教授が、現在取り組んでいるテーマ。それは、「16世紀のヨーロッパに現れた、珍奇な素材に描かれた一風変わった絵画作品」だ。

「本題に入る前に、当時のヨーロッパ美術がどのようなものであったかをご説明します」

16世紀中頃から後半にかけてのヨーロッパ美術は、“マニエリスム (Mannerism)” と呼ばれる時代である。マニエリスムとは、マニエラ (= 様式) を至上のものとする主義のこと。

では、どんな“様式”を至上としたかと言えば、マニエリスム時代の前のルネサンスの様式を指す。ルネサンスは15～16世紀に主としてイタリアで展開された、古代ギリシア・ローマの美の規範を復活させる運動。ボッティチェリなどを経て、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロという巨匠たちによって、単なる模倣ではなく、古代美術を凌駕するレベルにまで達した。これが、美術史における見解である。

「難しいのはこの後です。巨匠たちが活躍し、頂点を極めたルネサンス後の世代の芸術は、どこに向かえばいいのか、と」

そこで、16世紀の画家たちが考えたのは、「巨匠たちの様式、特にミケランジェロの様式を学習し、模倣し、洗練させることで、芸術を発展させることは可能である」というものであった。

マニエリスム絵画の最大の特徴は、技巧的な人体表現と難解な寓意だが、その理由は時代背景にある。16世紀中頃のヨーロッパは戦乱の時代であり、芸術家は宮廷に庇護を求めて集中した。そして、一部の鑑賞者のために制作することで、高度に洗練された、特権的な美術が確立していったのだ。

ところで、英語の「mannerism」にはもう1つ、「マンネリズム」の意味がある。マニエリスム美術のどこか初発性を欠いた、型の繰り返しに重きを置く芸術表現は、「ルネサンスの亜流であり退廃である」というマイナスの評価をされることがある。

一方で、マニエリスム時代の積極的評価として、「マニエリスム時代は、17世紀のバロック美術の揺籃期である」というものがある。例えば、風景画や静物画、風俗画といった、印象派やポスト印象派にまで脈々と受け継がれる近代絵画ジャンルは17世紀のオランダで成立したが、その原初的形態がすでに16世紀後半に発生していた、という見方もあるのだ。

## ●ヨーロッパ絵画の一般的な形態

「マニエリスム時代の絵画を見ていて気づいたのが、絵画形態の多様化現象でした」

16世紀半ばから珍奇な絵が出現し始めて幅をきかせるにもかかわらず、17世紀中頃には姿を消してしまう。これは何だろう、という疑問が研究を始めるきっかけだったという。

「多様化現象を検証する前に、まずはヨーロッパ絵画の一般的な形態を見てみましょう」

1つめが「油彩画（油絵）」だ。絵具は油彩絵具、絵画が描かれる素材である支持体は板やキャンバス。完全な油彩画を最初に描いたのは、15世紀のネーデルランドの画家、ヤン・ファン・エイクである。最初期の油彩画は、薄く溶いた絵具を何層も塗り重ねて筆の跡を残さない描き方だった。

2つめの「テンペラ画」は、顔料を卵や膠で練った不透明な絵具を用い、支持体は板が基本。軽やかかつ鮮やかな色彩が特徴だ。

3 つめは「フレスコ画」。絵具は水溶性、支持体は壁面で、壁に漆喰を塗って湿かなく、うちにすばやく描く技法である。その代表作は、ルネサンスの巨匠たち、ラファエロの〈アテネの学堂〉、ミケランジェロの〈アダムの創造〉である。

ただし、同じくルネサンスの巨匠であるレオナルド・ダ・ヴィンチの〈最後の晩餐〉はフレスコ画ではない。これが 4 つめの「油彩壁画」である。ネーデルランドから油彩画の技法が伝わると、イタリア人は「油彩の精緻な描写を壁面に再現したい」と考えた。レオナルド・ダ・ヴィンチはそれに果敢にチャレンジしたわけだが、しかし、最初に油彩壁画技法を完成させたのは、セバスティアノー・デル・ピオンボであった。

5 つめは「水彩画」である。絵具は透明水彩絵具と不透明水彩絵具で、支持体は基本的に紙や羊皮紙。水彩画が用いられたのは、伝統的には写本挿絵である。

## ●多様な絵画形態とは

これら 5 つの一般的な絵画形態に属さないもの。その 1 つめは、石板に油彩で描く「石板油彩画」だ。石板はさまざまで、美しい青色のラピスラズリや半透明で縞目のあるアラバスターを用いたものなどがある。

2 つめは銅板に油彩で描く「銅板油彩画」。ヤン・ブリューゲル（父）やスプランゲルの作品などは小型ながら、細かな筆致で描かれている。

3 つめが、絹に水彩絵具で描く「絹本水彩画」である。ヨーロッパ絵画においては非常に珍しいもので、ジュリオ・クロヴィオ作とされる〈聖骸布〉は、絹によって、キリストの遺体を包んだとされる「聖骸布」を再現している。

「こうした風変りな絵画が多く残されているのですが、注目したいのは質の面です」

17 世紀も後半になると、一流どころの画家はこの種の絵画制作にはあまり関与しなくなるが、16 世紀から 17 世紀前半にかけては、スプランゲルをはじめとする錚々たる芸術家たちが制作を行い、質の面でも傑出していた。「そうすると、絵画形態の多様化というのは、この時代固有の現象だと考えることができるでしょう」

さらに「絵と何か」ということも大きな問題だと、平川准教授は言う。

「画像データや書籍の図版として眺めることが多く、絵は単なるイメージデータとして認識されがちですが、実は絵というのは“モノ”。支持体によって作品形態や視覚的効果が決まり、それに見合った鑑賞形態も存在したはず。つまり、絵画をこれら支持体や鑑賞法も含めた総合体として捉えると、絵画形態の多様化を生んだマニエリスムの独自性が浮かび上がるのではないかと、という考えに至ったわけです」

ではその独自性とは何なのだろうか。

現在の絵画は、壁に掛けて鑑賞するタブロー画形式が一般的だが、そうした鑑賞法が確立したのは17～18世紀のこと。中世には多様な絵画のあり方が存在していた。例えば、二連板と呼ばれる、聖母子像と注文主の肖像画などがセットになった絵は、家庭での祈りの際に使用された。あるいは、薬局の戸棚の扉に描かれた花の静物画もある。

「祈りの道具や扉など幅広かった絵画形態が、額縁の中に閉じ込められ、鑑賞法が画一化に向かう。その流れに逆らい、既成の枠組みを超えて、あえて多様な絵画形態を生み出し拡張しようとしたのが、マネリスムの独自性ではないでしょうか」

## ●絵画形態の多様化現象の研究における5つの視点

絵画形態の多様化現象の研究に当たって、平川准教授が特に重要と考えているのが、次の5つの視点だ。

- ①絵画形態の誕生の経緯と流布の様相
- ②主題選択との関連性
- ③支持体が作品に与える象徴的価値
- ④鑑賞形態と受容の様相
- ⑤同時代人の評価および芸術理論との関連性

まず、誕生と流布について、「石板油彩画はパラゴネ（paragone）が関与していたと考えられます」と平川准教授。パラゴネとは諸芸術の優劣論争のこと。造形芸術と文学、造形芸術の中でも絵画と彫刻などを比較して、類似点や相違点、優劣を議論するもので、15世紀より主としてイタリアで流行した。

石板油彩画の誕生に関わるのが、絵画と彫刻の優越論だ。絵画擁護派のレオナルド・ダ・ヴィンチは、「三次元のを二次元で表現する絵画は知的かつ困難な作業であり、天候や風景も描写できる」と述べている。一方の彫刻擁護派は、「彫刻は修正が難しいという困難さがあり、さらに多視点性がある」と述べ、最も強く主張したのが耐久性であった。この耐久性の問題に対し、さまざまな試みを行ったのがセバスティアノー・デル・ピオンボである。自らが開発した油彩壁画技法を石板油彩画に転用したほか、金属板にも油彩画を描いている。そうして完成させた石板・金属板油彩画は、絵画の脆弱性を克服した“永遠の絵画”として絶賛された。

ちなみに、金属板油彩画の発生に関してはもう1つの系統があり、現存していないが、パルマで活躍したコレッジョ、パルミジャニーノがほぼ同時期に銅板油彩画を描いている。

主題選択だが、セバスティアアーノ・デル・ピオンボは基本的にスレート板だけを使っており、スレート板の暗色が、自分の描く宗教主題の表現に適していると考えたようだ。

象徴的価値について、特に君主の美德を称揚する主題を扱った銅板油彩画は、半永久的に残る銅板によって、永遠性や記念性という意味を与えていたと考えられる。また、絹本水彩画は作品に宗教的な権威を与える意味があった、と平川准教授は指摘する。

また、特製の枠組みを施した石板油彩画が王侯貴族の礼拝堂に置かれたり、両面に描かれた銅板油彩画は戸棚や引き出しの扉に使われるなど、多様な鑑賞や受容形態が存在していた。

同時代人の評価や芸術理論との関連性については、レオナルド・ダ・ヴィンチが次のように述べている。「しみで汚れた壁や石の斑紋は、画家の想像力を刺激するもの。それらを見て、さまざまな事象を思い浮かべることが、構想力を鍛える有効な方法である」

今後の進展が期待される平川准教授の研究だが、「今日の話は現時点での見解です。いずれ研究成果をまとめて世に問いたいと思います」との抱負で講演を結んだ。



「特殊な支持体を使うのは、画家の意思か注文主の意向か」という質問に、「ケースバイケースですが、注文主の意向で選ぶこともあれば、画家自身が収集家たちの需要を見越し、売れると判断して選ぶこともありました」と平川准教授